

中学校家庭科：家庭生活領域 家庭における自分のあり方を考える － 一日お母さんの体験を通して －

永原 朗子*

岡 陽子**

A Study on Student's Role at Home

－ Based on their Practice of Playing the Role of a Mother for a Day －

AKIKO NAGAHARA*

YOUKO OKA**

(Received November 21, 1994)

キーワード：自分のあり方 一日お母さん 家庭生活 家事仕事 家族の役割

はじめに

現代の子どもたちにとって、家庭とはどのような場所なのだろうか。子どもたちは、家庭の中で何を考え、どんな役割を果たして生活しているのだろうか。

例えば、子どもの家事参加を考えた場合、家事の社会化・省力化により、その必要性はほとんどなくなってきた。学歴社会や子育て観の変化により、親は子どもに勉強は強要しても、家事参加を要求することは少なく、子どもからもまた、主体的に参加することはない。子どもの生活実態を見ると、塾通いや習い事、また、遠距離通学などから家庭の中で過ごす時間は少なく、家庭以外の人々と過ごす時間や活動が、子どもたちの生活の中心となっている。

このような毎日を過ごす子どもたちにとって、家庭とは何かを考えた時、それは「安らぎの場」や「疲れた体を休ませる場」であっても、「家族の一員としての自覚をもち、積極的に家事参加をし、生活を築き上げていく場」であるとはとても言い難い。また、家庭外での自分の存在（あり方）に比べ、家庭における自分の存在（あり方）には無頓着で、意識して振り返ることはほとんどないと言えるのではないだろうか。

このような状況から、生徒たちが自分の家庭生活の現実を見つめ、家族の役割という面から、よりよい家庭生活のあり方や家族とのかかわり方について考えさせることによって、家族の一員としての自分のあり方を自覚させ、その実践への意欲を持たせることをねらいとして、授業を設計し実践した。そして、授業を展開するにあたって、生徒の主体的な学びにつながるように、6つの活動を意図的に提示した。

* 山口大学教育学部家政教育

** 山口大学教育学部附属光中学校

本研究は、6つの活動に留意した授業から、生徒たちの意識の変容を考察しようとするものである。

なお、授業実践は、山口大学教育学部付属光中学校1年2組（男子19名、女子19名、計38名）；岡陽子教諭によるものである。

1. 授業設計にあたって

（1）題材設定の視点

本題材は、自分の家庭生活の現実を見つめ、家族の役割という面から、より良い家庭生活のあり方や家族とのかかわり方について考えさせることによって、家族の一員としての自分のあり方（役割）の自覚と、その実践の意欲を持たせることをねらいとしたものである。

生徒の家庭生活や家族の実態、家族観・家庭観は多様である。そこで授業に先立ち、生徒の家族意識について調査したところ、次のような傾向をもつことがわかった。

- ①生徒は、家庭に対して明るさや楽しさを求めており、家庭生活における満足感を家族関係の良さに見出している。
- ②生徒は、家族の一員としての自分のあり方について考えることがほとんどなく、家庭生活に関する問題点に目を向け、家庭生活をより良く向上させていこうとする意識は、かなり薄い。

このような傾向から、これまで課題意識をもって見つめることのなかった家族の生活について見直させ、自分自身の生活課題の解決を図らせる活動を通して、家庭における自分のあり方を考え、家庭観・家族観を豊かにし、より良い家庭生活の実践に結びつけたいと考えた。

具体的には、「一日お母さん」の体験を取り入れ、その体験から家族や家庭生活に対する多様な認識を、生徒同士が相互に関わり合い、そこで得られた新たな事実や、それに対する考えの相互評価による新たな価値観のもとに、再度、自分の生活を見つめ直し、問題点を発見させ、家庭生活における自分のあり方（役割）について考えさせる。

（2）題材構成と6つの活動

全授業時間は4時間である。題材構成および配当時間、学習内容については、表1に示すとおりである。また、授業を展開するにあたって、生徒の主体的な学習につなげるため、以下の6つの活動を取り入った。

- ①生徒の家庭生活の実態を把握し、生活における課題を強固に意識させる。
- ②生徒の家族観（家族とのかかわり方や自分の役割）を明らかにさせる。
- ③家庭生活を多角的に見させ、それに対する自分の考えをもたせる。
- ④他者の考えに主体的に出会わせ、お互いの意見を高めさせる。
- ⑤変容した家族観に気付かせ、変容させたものを意識させる。
- ⑥学習を振り返り、本授業の学びを生活に生かすことを考えさせる。

表1. 題材構成と学習内容

時	学 習 内 容	主 眼	指導上の留意点
1	・家庭生活を見つめる (課題の意識化)	家庭生活への関心をもち、 家庭生活をよりよくするた めの課題を見つけることが 出来る。	生徒の家庭生活の実態や 家族観を把握させ、問題 を発見し、生活課題を強 固に意識させる。
2 3	・家族の役割 ～一日お母さんの体験 を通して考える～ (課題の追究)	家庭において母親の果たし ている役割の体験を通して 得られた知識により、家族 のあり方やその役割につい て理解し、新しい家族観が 形成出来る。	「一日お母さん」の体験 を通しての意見をお互い に関わり合わせ、その中 から生まれた課題を追究 させることにより、家族 の役割について考えさせ る。
4	・家庭における自分の あり方を考える。 (学びの生活化)	新しい家族観の下に、より よい家庭生活を営んでいく ために、家庭における自分 のあり方を考え、主体的に 実践していこうとする意欲 をもつことが出来る。	自分の家族観を変えた学 びとそれを支えたものを 見つめさせることによっ て、自分のあり方を考え 生活に生かす方法を考え させる。

2. 授業の展開

(1) 生徒の家庭生活の実態を把握し、生活における課題を強固に意識させる。

生徒たちにとって、あまりにも身近である家庭生活の課題を意識させることは、非常に困難である。そこで、自分たちの家族や家庭生活についての実態を知ることによって、問題点が浮かび上がり、課題意識を持たせることが出来ると考え、事前に「自分たちの家族や家庭生活について」のアンケートを実施した。結果は表2に示すとおりである。

この結果より、生徒のほとんどの家庭では、母親が主に家事を行っていることがわかる。

生徒たちも洗濯や掃除などの手伝いを多少はしているが、自分の役割として主体的に行っている者は3分の1にも満たず、親に促された時や、自分の気が向いた時にするといったのが現状である。

この結果は、生徒たちにとって当然のものばかりであるが、それをあえて提示し、問題意識をもって見させると、いくつかの問題点が浮かび上がってきた。そのうち、表3に示す2点を特に取り上げて、生徒たちに新たな課題として設定した。

表2. 家族・家庭生活に対する意識調査

アンケート結果

- (1) 家族の構成について。
- ア、核家族(31人)……内、母子家庭2人
 3人家族(8人) 4人家族(14人) 5人家族(11人)
- イ、拡大家族(7人)……内、祖父母と同居3人、祖母と同居4人
 4人家族(1人) 5人家族(4人) 6人家族(1人)
 7人家族(0人) 8人家族(0人) 9人家族(1人)
- (2) 家族との生活をどのように考えていますか。
- ア、とても快適である(13人) イ、快適な方だ(18人)
 ウ、あまり快適とは言えない(6人) エ、まったく快適ではない(1人)
- (3) 家事を主にしているのは誰ですか。(複数回答)
- ア、父(1人) イ、母(35人) ウ、兄、姉(0人) エ、自分(1人)
 オ、弟、妹(0人) カ、祖父母(1人) キ、その他(1人)
- (4) 家事であなたがしている役割は何ですか。(複数回答)
- ア、炊事(7人) イ、洗濯(7人) ウ、掃除(14人) エ、買物(5人)
 オ、介護、養護(5人) カ、その他(7人)
- (5) (4)で答えた役割をどのくらい行っていますか。
- ア、毎日(13人) イ、一日おき(4人) ウ、週に1、2回(7人)
 エ、自分の気が向いたとき(8人) オ、親などに言われたとき(6人)
- (6) ある日曜日、お父さんは出かけ、あなたはテレビを見ています。お母さんが台所で後片付けを始めました。あなたは、どうしますか。
- ア、自分から本気で手伝う(8人) イ、少し手伝う(15人)
 エ、言われれば手伝う(12人) エ、そのまま、逃げる(1人)
- (7) お母さんは出かけており、家族はお父さんとお姉さんと弟とあなたです。食事を終えた後、家事の分担はどうしますか。
- ア、積極的に参加する(28人) イ、少し手伝う(9人)
 エ、他の家族に任せる(1人) オ、店に頼む(0人)

表3. 生徒があげた問題点

生徒があげた問題点

- ①毎日の家事を母親だけにさせていてよいのだろうか。
 ②設問(6)(7)の結果を見ると、母親がいる時といない時では、私たちの意識が違う。これはおかしいのではないか。

共通の課題

家事は母親の仕事だろうか。

こうして生徒自身の家族・家庭生活を見つめさせ、生徒があげた疑問を集約して、新たな課題を設定することによって、生活における課題を強固に意識させた。

(2) 生徒の家族観(家族とのかかわり方や自分の役割)を明らかにさせる。

次に、共通の課題「家事は母親の仕事なのだろうか。」に対する生徒自身の考えを自由に書かせてみた。これは、現在の自分の家族観を明確に認識させるためのものであるが、これについては、次のような考えが出された。

課題に対する生徒の考え

ア. 課題を「当然だ」と捉える考え

- ・家にいる母はすることがなく、時間があるから。
- ・いつもしているから慣れている。
- ・昔から家事は女の人がするものと決まっている。
- ・父は会社、私は学校、母は家事をするというのが分担である。
- ・母親がしなければ、周りの人に負担がかかって困る。
- ・テレビドラマでもほとんどの家では、母親が家事をしている。
- ・おばあちゃんから母へと、家事は受け継がれるものである。
- ・家事はそれなりのコツや工夫があり、母がすると能率が良い。
- ・する気持ちはあっても実際には出来ないので、母親がした方がよい。

イ. 課題を「当然ではない」と捉える考え

- ・母親が外で働いている場合は、みんなが協力すべきだ。
- ・父親もすべきだ。
- ・誰がしてもよいのではないか。
- ・暇で健康な人がすればよい。
- ・みんな一緒に暮らしているのに、母親だけに任せているのはおかしい。
- ・今は男女が平等なのだから。
- ・母親だけが忙しい思いをするのではなく、みんなで協力すればよい。
- ・日頃からみんなが助け合っていないと、いざという時、何もできない。
- ・母親だけでは絶対にできない。家族全員が力を合わせないといけない。
- ・私の家では家事の半分は父親がし、私もたまには手伝っている。
- ・母のしていることは、家事以外のこともあるのではないだろうか。
- ・「家事」は「家の仕事」なのだから、その家に住んでいる人がすべきだ。

上記のように、生徒の家族観は多様であり、「当然ではない」と捉えている生徒であっても、その理由は様々であり、自分本位な見方をしている者も少なくない。これは、生徒の個性でもあり、また、親の姿や考え方など生育環境が影響しているものと考えられる。

これらの考え方を他の生徒にも触れさせ、自分の考えの確認を行った。

(3) 家庭生活を多角的に見させ、それに対する自分の考えをもたせる。

家族の一員としての自分を意識させ、家庭における自分のあり方を考えさせるためには、これまでの限られた視点からだけ見つめるのではなく、異なった立場から多角的に考えさせる必要があると考えた。そこで、家事労働の中心的な担い手ともいえる母親の立場に立って、「一日お母さん」の体験を取り入れ、家庭生活を見つめさせた。

体験にあたっては、各家庭の様々な事情を考慮して、特に、条件（実施時間や内容など）は出さず、家族の協力を得ながら出来る範囲内で行わせた。そして、この体験を通して新しく生まれた考えを「一日お母さん体験日記」という形で書かせた。

生徒の書いた日記の一部を上げると次のようである。

—「一日お母さん体験日記より」—

- とても疲れた。こんなに疲れるものとは思ってもみなかった。いつもしているお母さんはどんなにつらいだろうか。これからは、土、日曜日にはせめてお手伝いしようと思う。そして、何よりも家事のつらさがわかった。また、家事はお母さんの仕事だけではなく、家族で協力してするものだということがわかった。
- 実際にしたのはたった3時間だったが、最初は「これくらい大丈夫」という気持ちだった。しかし、だんだん面倒くさいなあと感じるようになった。毎日、これの何倍もの家事をしている母親はすごいと思い、そして感謝した。今までの私は、学校より家事をしている方がいいと思っていたが、今日の体験によって母の気持ちがよくわかった。母が「疲れた」と言っても「それくらいで」と思っていたが、これからは家に帰ったら出来るだけ手伝いをして、母を楽にさせてあげたいと思った。
- 宿題をしていなかったせいもあって、時々しか出来なかったのもっと頑張れば良かったと思う。これからは、宿題などを早めにやって、しっかり仕事をしたいと思った。毎日、こんな大変な仕事をしている母親に、文句ばかり言っていた自分が悲しい。
- とても疲れ、面倒くさいと感じた。だから、私たちが言うことを聞かなかったりすると、お母さんは大変なのだと思う。改めて、お母さんの大切さを実感した。
- 僕は夜の仕事を主にした。この短い間でも母のしている仕事は大変だった。家族が多いので食事の用意、後片付け、洗濯、どれも沢山あって大変だ。特に、ふとん敷きは喘息の僕がいるので気をつけてくれ、とても助かっている。どれもお母さんのしている仕事は、重要で欠かせないものだということがわかった。休む暇もなく働くお母さんは、とてもつらそうだ。僕は面倒くさがり屋なので、全部は出来ないと思うが、少しでも手伝っていきたい。
- お母さん役を体験してみて、初めて母のしていることがいかに大変で、そして大切な役割だということがわかった。これからは、母だけに任せっきりだと悪いので、少しでも手伝っていかないといけないと思った。
- あれこれ自分でやっているとと思っていた日常生活を振り返ってみるとビックリ！一日の仕事の大半を母がしているということを知らされた。私の母は看護婦で一日中病院で働き回っているのに、帰ってからも家の仕事があると思うと、かなり体がだるくなるのではないかと思う。その体の疲れを少しでも楽にさせてあげなくてはと思った。確かに、今日一日私がしたことは母の半分にしかならないだろう。でも人間、心が大切！、心を込めてやれば小さなことでも分かってもらえるよね。

- ・久しぶりに家の仕事をした。思ったより埃が溜まっていて床の隅が汚れていた。いつも置いてあるものが掃除機をかける時に、邪魔になった。油はとれにくくて、水で洗剤を流すときも少しべたべたした。今日、掃除をして困ったことは、物の置き方が乱雑でしにくかったことだ。これからは、あまりお母さんにさせないで自分でしようと思った。
- ・家事はだれにでも出来るという思いもあって、正直、「なんだ、楽じゃん。」と思っていた。しかし、掃除も買い物も結局はお母さんをあてにしていた。自分では掃除の仕方も、何を買えばよいかも分からなかった。はっきりいって、私は自分の幼さを感じた。
- ・お母さんの代わりをしてみると、普段、何気なく見ていたお母さんの仕事が、いかに大変かが分かった。いつも当たり前のようにこなしているお母さんを、改めて凄いと思った。また、私たち家族をかげながら支えてくれているお母さんだということにも気付いた。これからは、私も少しは手伝って、お母さんと一緒に家を支えてあげたいなあとと思った。
- ・母の気持ちになってみた。こんなに大変な仕事を、母は何故、毎日しているのだろうか。少なくとも、楽しんでしているようには見えない。私が、実際に体験してみてももううんざりという思いであるのに…。ならば何故、母はこんなに大変な家事を毎日しているのだろうか。また、どんな思いでしているのだろうか。
- ・何度も愚痴をこぼした。いつもは口うるさい母だけど、こんな仕事をしていると思うと、なぜか尊敬してしまう。今日、食器洗い機を使った僕は、母かどんなに水がつめたくても水の節約と言って手で洗うことや、使い方がわからなくて適当にやったアイロンがけでさえも、体の一部のようにして使いこなす母に対して、愚痴一つ言わない母は、すごいなあと心から思った。
- ・家族の中で一番大変なのは、お母さんだと思った。はっきり言って、お母さんには日曜日なんてない。母は食事の用意をする時、後片付けが簡単にいくように、ボウル一つですませせていたり、また、どれも同じ時間に出来るように、時間のかかるものから作っていた。いろんなところに、工夫をしていたことが分かった。
- ・こんな仕事を毎日しているなんて、お母さんは偉いなあとと思った。そして、同時にかわいそうだと思った。
- ・本当に女に生まれなくて良かったと思った。学校に行っている方が落ち着いてられるし、気分もリフレッシュできて本当に良かった。僕は、もう疲れ果ててしまった。母を、絶対、大切にしなければならないと思った。今度は、「一日お父さん」をやってみたいと思った。
- ・私は、口では「自立している。」と言っていたけど、それは口先だけで、実はそうでもないことが、今回の体験で考えさせられた。

(4) 他者の考えに主体的に出会わせ、お互いの意見を高め合わせる

前述のように、生徒たちはそれぞれの家庭において「一日お母さん」の体験をし、これに対する自分なりの考えを日記に書いた。

そこで、この体験日記を発表させ、それぞれの経験や考えを共有させ、また、他の考えに触れることで生まれた気付きや感想、疑問を出し合い、お互いの意見交換をさせた。

ここでは、「こんなに大変なものとは思わなかった」という考えが、生徒たちの共有した感想であった。体験日記を発表し合うことによって、生徒は一律に、だれもが同じ感想をもったことに安堵感を覚え、改めて家事の難しさや労働の重さを実感したようである。

一方、家事を能率よく進めるためのちょっとした工夫に気付いた者、母への尊敬の念を深めた者、自分の幼さを痛感した者、などもいた。

しかし、この時点での生徒たちの考えの大半は、家事を自分にとっては非日常的なものとしてしか捉えておらず、課題に対する自分の考えを変容させるには至っていない。

その中で、Mさんの日記……母の気持ちになってみた。こんなに大変な仕事を、母は何故、毎日しているのだろうか。少なくとも、楽しんでしているようには見えない。私が、実際に体験してみても、もう、うんざりという思いであるのに…。ならば何故、母はこんなに大変な家事を、毎日しているのだろうか。また、どんな思いでしているのだろうか。に生徒は、はっとした。

自分の体験によって、感じ取った思いばかりを口にしていた生徒たちにとって、この母親の思いに迫るMさんの日記に、課題を追究するための大切な問題点を感じとったのである。

そこで、家事という重労働を毎日こなしている母親の気持ちに全員で迫らせた。

- ・母親は、毎日どんな思いで家事をこなしているのだろうか。
 - ・母親に家事をさせているものは、一体何なのだろうか。

この思いに対して生徒自身の考えを聞くと、次のような意見を上げた。

・家族のため ・家族への願い（皆が楽しく暮らせるように） ・家族の喜ぶ顔がみたい
・母親がするものだという私たちの気持ち（周囲の固定観念が、母に家事を押しつけている）
・愛情（夫や子供を思う愛情が深い） ・得意だから ・昔からの考え（女性は家にいて家事をし、家を守っていくものだという考えが残っている）
・家族の健康管理（家族全員が病気をせず、仲良く健康に過ごせるように）

このように、家事を母親にさせている理由は、「家族一人ひとりのものの考え方」「家族同志の愛情」「日本古来の習慣」などであったが、これらの理由に対して、生徒同志の意見を交換させた。そうすると、「家事は母親がするものだ」という固定観念と、自分を含めた家族の気持ちにある同様の固定観念の2つが、母親を縛りつけているということに話しが傾いていった。そして生徒たちは、「家事の大部分を母親が担っている」というこれまでの当然であったことに対して、疑問を強めていったのである。

（5）変容した家族観に気付かせ、変容させたものを意識させる。

「一日お母さん」の体験的活動を通して得られた認識の意見交換という学習によって、新たな認識が生まれことから、再度、「家事は母親の仕事なのだろうか」の課題を見つめさせ、変容した家族観に対する考えを書いてもらった。

以下は、変容した家族観である。

- ・「父は仕事をし、母は家事をする」という昔からの考えが、まだ残っているから、皆ですべきだと思っても、なかなか行動に移せない。家族が団結しなければ。
- ・母に任せている今までのやり方を反省した。分担をして、皆ですべきである。
- ・家事は、家族で分担すれば良い。
- ・母だけに任せておくのではなく、家族みんなですれば母は少しでも楽になるし、母がいない時でも出来るようになる。
- ・誰がしても良い。というよりは、誰もがすることなのではないかと思う。そして、全部するのは大変だけど、部分的にみれば、誰にでも出来ることはあると思う。
- ・やはり、家族は助け合って生きていくものだと思う。家事も同じだろう。
- ・母がするのは当然ではないと思うけれど、やっぱり、母がしてくれると安心できる。
- ・お母さんは、私たちのために一生懸命してくれる。そんなお母さんに甘えて、任せておくのはかわいそうだ。これからは、皆で協力してやりたい。
- ・昔は、そうだったかもしれないけれど、今は今。家族で協力し合ってやっていかなければならないんだ。
- ・家事は、皆が助け合っているもの。食事一つとっても、栄養のバランスとか塩分量とかを考えなくてはいけないのに、そんな奥の深い家事を、一人で全部やっていたら体をこわしてしまう。
- ・家にいようが、共働きだろうが、家事はお母さんだけの仕事ではないと思う。
- ・やはり、家事は母に任せるだけでなく、自分も何かしなければという気になってくる。今までは、母が家事をしていても何も思わなかったが、今は違う。
- ・お母さんの気持ちを大切にしながら、なるべく出来ることは家族全員ですべきだ。それも、お母さんみたいに「皆のため」と思いながら、進んでやると良いと思う。
- ・母にしか出来ないのだろうか。家族への愛情、家族への思いをつのらせて、出来るのではないだろうか。
- ・母にだって他にやりたいことがあるはずだ。
- ・母親一人ですると他の人に負担はないが、みんなが分担してやると、短時間で能率良く出来る。それに、いつまでも母親だけに頼ってはいられない。
- ・とても大変な家事を、母は「みんなのため」や「健康」のことを考えて、していることがわかった。家事はみんなでするものだ。
- ・母さんの仕事は、家事だと決めつけるのはおかしいと思う。家事は、皆で協力してするものだ。でも、時間的なことを考えると、どうしても母さんにしか出来ない場合は仕方がないので、母さんに任せる。
- ・やっぱり母親の仕事だと思う。母は、よく家族の健康のための料理を考えてくれたり、しているので、自分でもやろうという気持ちがあると思っているのだと思う。
- ・交替でやればよい。誰がやってもよい。母ばかりではかわいそうだ。
- ・家事は母親だけの仕事ではない。家族の都合とか、昔からのしきたりが、母に仕事を押しつけているのではないかと思う。

前段階での課題に対する考えと比較すると、かなり変容が見られ、大半の生徒が「家事は家族全員で協力するもの」という考えになっている。

次に、自分の家族観を変容させたものは、「何だったのか」「どこにあるのか」を自己評価させた。具体的項目は、次の4つである。

- ア. 自分の「一日お母さん」の体験
- イ. 友達の「一日お母さん」の体験日記
- ウ. 授業の中での友達の意見
- エ. その他

生徒の自己評価を項目別に上げると、次のごとくである。

ア. 自分の「一日お母さん」の体験

- ・家事のつらさと大切さがわかったこと。
- ・家事がこれほど大変だと言うことに初めて気付き、もっと自分も参加していかないといけないと感じた。
- ・母がこんなに疲れて大変な仕事を毎日していることがわかった。
- ・お母さんのしている家事仕事は、自分が思っていたよりもずっと大変だった。
- ・お母さんはかわいそうだなあ、大変そうだなあと思った。
- ・家族のためにはと思い、いやな仕事も我慢してやってくれる母に感激した。
- ・予想以上に大変だったことがわかった。

イ. 友達の「一日お母さん」の体験日記

- ・みんな同じ考えをもって「一日お母さん」をし、その結果、同じようなことを感じていたこと。
- ・Fさんの体験日記の中で、「自分は自立していると思っていたが、そうではなかった。」と言う部分。
- ・Mさんのつぶやきを聞いて、お母さんの気持ちが分かったような気がした。
- ・みんなも考えることはだいたい同じで、「母一人では大変だ」ということだった。
- ・みんなやる気マンマンだから、私も負けてはいられないと思った。
- ・お母さんの気持ちを考えている人がいて、考えさせられた。
- ・みんな「疲れた」「失敗した」などと言っているが、初めからうまくやれる人はいないのだから、少しづつ頑張っていけばいいと思った。
- ・お母さんの本当のありがたみを発表した人の意見を聞いて、そう思った。
- ・「お母さんは何が楽しくて、家事をしているのだろう。」という意見に、自分の母親のあり方を考えさせられた。
- ・「普段も家事に参加していこう」とみんなが言っていたので、私も自分の考えを見直して、積極的にしていこうと思った。

ウ. 授業の中での友達の意見

- ・みんなが、「家事はお母さんだけの仕事とは言えない」という意見を持っていたこと。
- ・A君の体験日記の失敗談
- ・私は昔からの考え方によって、このような習慣が出来ていたと思っていたが、友達の意見を聞いて、母は、本当は「家族のため」とか「喜ぶ顔がみたい」からと思っ

て、いつも働いてくれていたのかもしれないと思った。

- ・「昔からの考え」という意見を聞いて、お母さんを縛り付けているようにも感じた。
- ・お母さんも、家事以外の仕事をしているのだという意見
- ・とにかく母を大事にしなければならないという意見
- ・「みんなの喜ぶ顔がみい」という意見は、なるほどと思った。
- ・母親が一人で家事をしているのは、私たちの考えや態度がそうさせているのだと思った。

エ. その他

- ・「お母さんは何を思って、何を考えて家事をしているのか」と考えたとき。
- ・母親の気持ちを考えてみた時、なんとなく、自分もやらなければと思った。
- ・時々、お母さんが「みんなも手伝ってくれればいいのに」と言っていたのを思い出した。

以上のような自己評価によって、自分の家族観を変容させたものは「どこにあっののだろうか。」また、「何だったのだろうか。」を見つめることが出来、それは同時に、家庭生活を多角的に見つめ、自分の学びをより豊かなものへと発展させ、生活の実践へとつながっていくものと考ええる。

(6) 学習を振り返り、本授業の学びを生活に生かすことを考えさせる。

家庭科の学習は、教室での学びが主体的かつ継続的に、自分自身の生活に生かされてこそ、その意味は大きい。

従って、授業を通して得た生徒たちの学びが、よりよい家庭生活を営んでいくことにつながるようにするために、家族の生活との関わりから自分のあり方を考える活動の場を与えた。

そこではまず、自分の日常生活を振り返り、自分自身が家庭の中でどのような存在であり、どのような役割を果たしているのかを客観的に見つめさせた。そして、これらのことをグループで話し合わせることによって、家族の中での存在と役割について、再確認させた。その上で、自分の生活の中で改善できるところ、改善しなければならないところを見つめさせ、具体的な改善策と実践への意欲を感想文としてまとめさせた。

まとめられた感想文は、以下のごとくである。

具体的な改善策と実践への意欲

- ・ムダな時間がとても多く、家庭の中で何もしていないことがわかった。自分のことだけにしか時間を使っていない。ムダな時間を過ごすくらいなら、家族みんなのタメになることをしたい。
- ・家事をもっと積極的にしていきたい。そのために、一日の日程表をつくり、時間を守ってきびきびと行動したい。特に、母にとって大変そうな仕事を見つけ、自分から進んでやりたいと思う。

- ・家庭の中で、自分が周りの人にどれだけ頼ってばかりいたかがよくわかった。いつまでも「人任せ」ではいられない。自分ですすんでやろうという気持ちを持って、何ごとにも実践していこうと思う。
- ・父や母にだけ働かせて、自分だけ楽にしているわけにはいかないと思う。自分の甘え心に負けず、家族みんなで家事だけでなく、それ以外の仕事も協力して行いたい。
- ・これまではしてもらう一方だったけれど、これからは私の方からみんなに役立つことをしていきたい。体を動かすことだけでなく、今まで以上に思いやりを持って、家族一人ひとりに摂氏、心の支えになっていけたらいいなあと思う。
- ・家族って、もっともっと協力しなければならないと思った。口で言うのは簡単だけど、みんなが同じように、心から協力していこうとする気持ちが大切だ。誰か一人だけが、大変な思いをすることがないように。
- ・自分はまだ子どもで、親が子どもを育てるのは当然と思っていたけれど……、だからと言って、家事を全部親がするというのは、おかしいと思いはじめた。子どもでも生きていくかぎり、家事をしなければならないと思った。
- ・家族が協力することの大切さがよくわかった。僕も家族の一人なのだから、家の仕事は、自分から進んでやっていきたいと思った。

家庭における今までの役割としては、新聞取り、食器並べ、食器下げといった程度のことであり、皆無のものも少なくなかった。

授業を振り返り、生徒たちは、自分の果たしている役割のあまりの少なさに、初めて気付いた様子であった。しかし現在、家族観が変容し、明らかに、家庭との関わりの中で自分のあり方を考えるようになったことが、感想文の中から伺われる。

おわりに

生徒たちは、「一日お母さん」という体験から、「家事は母親の仕事だろうか」という一つの課題が生まれた。これを6つの活動の中で追究しつづけ、家庭における自分のあり方を考えていった。

課題の意識化→課題の追究（体験学習を通して）→学びの生活化という一連の学習の中で、今、生徒たちは、新しい家族観のもとに、家庭における自分のあり方を認識し、主体的に実践していこうとする意欲が育ちつつあると思われる。